Ⅲ　事業報告会

ＮＰＯ・ボランティアグループによる子どもたちの体験活動促進事業報告会

日時　平成14年３月９日（土）13:30～16:00
場所　阪神・淡路大震災復興支援館
　　２階多目的室

○開会

○進め方の説明

○事業報告・質疑

発表者（発表順，敬称略）

1　小川　陽子［ツール・ド・コミュニケーション］
2　小島　祥美［ワールド キッズ コミュニティ］
3　三浦　一郎［特定非営利活動法人ブレーンヒューマニテイー］
4　前田　恵子［神戸須磨北おやこ劇場］
5　上垣　忠　［子ども自然村フロンティア会］

（休憩）

○講評・意見交換

講評者（五十音順，敬称略）

上地　安昭［兵庫教育大学教授］
佐藤友美子［サントリー（株）不易流行研究所部長］
清水　勲夫［（財）野外活動協会事務局長］
速水順一郎［兵庫県教育委員］

○閉会

○脇内県復興企画課長

ただいまからＮＰＯ・ボランティアグループによる子どもたちの体験活動促進事業報告会を開催いたします。

最近、「 100 人の地球村」という本が出てますけども、その中で地球を 100 人の村とすれば、男性の方が 48 人、女性の方が 52 人というような本が出ています。兵庫県を仮に 100 人の村としますと、15 歳以下の子どもたちが 15 人、働いている方が 68 人、65 歳以上の人が 17 人と、そういうような状況になっています。これを５年前と比べますと、100 人の村では子どもさんが１人少なくなって、お年寄りが３人増えています。そういうようなことから、被災地を含む地域の状況というのは、世界といいますか、日本の状況の縮図といっても間違いないのではないかと思います。

その中で若干減りつつある子どもさんですけれども、子どもさんには未来があると思います。そういう未来を含めて考えますと、震災当時、避難所なんかでいろんな水汲みとかそういうことをやって、いろんな自分の生きがいを見つけたというふうなこともおうかがいしたことがあります。ですから、そういうことからいろんな体験を通じまして、自分を発見していただこうと。あるいは、そういうことから地域の中で自らの役割をつかんでいただこうというようなことを企画して、今回の事業を興しました。

おかげさまで皆さんの大変な努力で、いろんな成果が得られると思います。今日の報告会というのは、そういう意味から非常に期待しております。せっかくの機会ですから、いろんな意見を出して、これからどうしていったらいいかというようなことについても意見交換をしていただけたらありがたいと思います。

早速、報告に入りたいんですけども、今日は先生方も来られておりますし、速水先生は、兵庫県の教育委員もされておりますので、子どもを取り巻く環境といいますか、そういう観点からご紹介していただけたらと思います。速水先生、よろしくお願いいたします。

○速水

どうも皆さんこんにちは。皆さんよくご存じだと思いますけれども、子どもたちがのびのびと生きる環境にあるかどうかというとですね、なかなか難しい部分がありますね。子どもはそう思ってても、周りはそうなっていない。

例えば、この中で携帯電話をお持ちでない方おられますか？　あっ、何人かおられますね。今はコミュニケーションの手法として携帯電話というのが当たり前になってきまして、私の近くの人に、まだ成人を迎えてない子どもを持つ方がいるんですけど、「子どもさんはいつもどこにいるんですか？」と聞くと、「ようわからへんのですが、携帯にかけると相手が出るからちゃんと元気にやっているみたいです。」と思っているらしいんですけれども、実際にはどうかわからずに過ごしているみたいなところありますね。

また、インターネットを使った形でのやりとりが非常に多くなってくると。今、非常に課題になっていますのは、面と向かってお話をさせてもらって、おやこ劇場だとかをやられる方とか、野外活動で子どもたちと接しておられている方はもちろんおわかりのことと思いますけども、子どもたちがどんな表情をしているかというのは、目を見ながら、顔を見ながら話をして理解できるということがあったり、声の勢いだとかでお互いの心の中を理解しあえるとかいうことで、お互いの心の中を理解しあえるとかいうことがあったんですけども、今や

そういう状況ではなくなってきてるということで、余り話をするのが得意でない人たちが増えてきました。

これは、話だけではなしに、文書もそうなんです。今のやりとりというのは、メールだとか、ｉモードなどを使ってやります。文章を作文するんではなしに、単語を少し連ねたような形のやりとりですから、文章を作成してのやりとりは非常に少ないです。だから、文章力というのも随分と日常の生活の中では落ちてくるということがあるんではないかということ、そういう意味でコミュニケーションの方法が非常に変化してきているので、だからこそ今の時代というのはお互いにフェイス・トゥ・フェイスでコミュニケーションを図ることの大事さを１つは痛感せずにはいられない部分がありますね。

もう一つは、私たちの生活様式がそうなっているんですけれども、発想から結果までが非常に早い。過程がない。過程というのは、試行錯誤したり、知恵を働かせたり、いろんな人とディスカッションしたりしながらつくり上げていく部分があるんですけれども、それがないですから、なかなかつくり上げていこうよという部分の体験が少なくなってきてます。これは日常生活でもそうなんですよね。何か欲しいなと思ったらすぐに出てくる。お腹が空いたらすぐ食べるものがある。冷たいものが飲みたいなと思ったら、冷蔵庫を開けたらすぐ出てくる。どっか行きたいなと言ったら、ちょっと車で行くということで、もう即いろんなことができるようになってきてるんですね。　もちろん、非常に経済的に豊かになったということなんでしょうけども、だけども、そのことによって失われていってるものもたくさんあるということは、皆さん方よくご認識いただいてることだと思います。

随分以前から言われてますけども、言われたことしかわからないとか、指示待ち族だとか、ということを言われて、言葉の含んでいるその大きな意味を理解するのではなしに、表にあらわれた音だけで理解してしまおうということがあるということです。

これが物事をつくり上げていく過程というものが、随分と私たちの日々の生活の中に抜けてきたことの１つの要因ではないかと思います。

そういう意味で、今回、皆さん方にお取り組みいただきました子どもたちの体験活動促進事業というのは、まさに子どもたちが、自分たちがメニューの中でどう話し合ったり、アイデアを出し合ったり、失敗も繰り返しながら、何を成し遂げていくかということ、成し遂げえなかった場合には、それをもう一度やり直しながら、チャレンジしていこうよ、という非常に豊かな体験を含んだ事業を取り組みいただいたんではないかと思います。

この成果が、随分と評価されて、また後ほどご紹介されると思いますけれども、県下で広くこういう取り組みをしていこうよ、というところへの展開にもつながってきたんではないかと思います。

皆さん方の取り組みが、ますます子どもたちの目線に立った発想として広がり、多くの子どもたちが、こういう体験ができるような場を私たちはどう広げていくかということを考えながら、今日の皆様方の取り組みの発表を楽しみに聞かせていただけたらと思います。

どうもありがとうございました。

（拍手）

○事務局

本日、講評していただく皆様方をご紹介します。

まず、先ほどお話いただきました兵庫県

教育委員会の速水順一郎様です。

そのお隣が、財団法人野外活動協会事務局長の清水勲夫様です。

１つ飛びまして、そのお隣が、兵庫教育大学教授の上地安昭様です。

それから、サントリー株式会社不易流行研究所部長の佐藤友美子様は、本日は午前中、京都の方で会議がございまして、少し遅れて来られるということですので、ご了承いただきたいと思います。

それから、審査員を務めていただきました小林郁雄様につきましては、本日、所用のためご欠席です。

引き続きまして、本日の報告会の進め方について説明させていただきます。まず、各グループに事業報告を行っていただきます。報告する順番につきましては、お手元の資料にお配りしてます次第の順番で進めさせていただきます。時間につきましては、事前に各グループにお願いしてますように 10 分程度でお願いしたいと考えております。発表終了後に各講評者の方、あるいは会場にお越しの方々から、質問等をお受けしたいと思いますので、質問等があれば、その場でお答えいただきたいと思います。

発表する場所ですが、こちらに用意しております演台の前でお願いします。それから、全てのグループの事業報告が終わりましたら、しばらく休憩をとりまして、その後、講評者の方からご提言などをいただいたり、あるいはグループの皆さんからの意見交換などを行いたいと考えております。

それでは、事業報告の方を始めさせていただきます。

まず、ツール・ド・コミュニケーションの小川さん、発表の準備はよろしいでしょうか。それではお願いします。

○小川

皆さん、こんにちは。ツール・ド・コミュニケーションスタッフの小川陽子と申します。私たちの団体は、子どもたちの手によるメディアづくりということで、こちらの助成金をいただきまして、今年の７月から活動を続けております。この活動というのは、どういう活動かと言いますと、子どもたちがビデオカメラを持って、自分たちの住むまちを取材したり、あとは自分たちが疑問に思っていることとか、そういうことを取材をしながら考えていって作った番組を発表していく、というのが本事業の活動になります。

本事業の目的ですが、まずは子どもたちから見た地域社会を広く世の中に発信するということ、そして２つ目は情報の発信者になることによって、子どもたち自身が社会に参画する機会を創出するということ。３つ目が、共同作業を通してお互いの違いを認めあえる子どもの育成をするということです。

子どもたちから見た地域社会を発信するということですが、これは、ここ数年、地域と子どもたちの関係が薄れてきているということもあって、自分たちのまちのことをよく知らない子どもたちが数多くいるということで、その子どもたちがビデオカメラを持って、まちを取材することによって、まちを知り、まちのことを外に子どもの視点で発信していくということです。

情報の発信者になることによって、社会に参画するということはどういうことかというと、これまで子どもたちというのは、私たちのような大人に自分たちの意見をぶつける機会というのは、なかなかなかったと思うんです。それは学校生活においても、地域の中でもそうだったと思うんですけども、そんな子どもたちがビデオカメラを持って取材して番組を作ることによって、自分たちが何を考えてどうしてほしい

のかというのを世の中に訴えていく機会をつくるということです。

そういった作業を通して、子どもたちが番組を作る過程の中で、自分たちはどんな意見を持って、何を誰に発信していきたいのかというのを考える段階で、子どもたち同士の意見のぶつかり合いとか、そういうのを通してお互いの違いを認められる子どもの育成をするということです。

この事業の実施体制ですが、実施主体は私たちツール・ド・コミュニケーションになります。あと協力していただいた団体がありまして、まずは地元、私たちの活動する長田の子ども会で真陽子ども会という地縁組織があります。あとは、私たちの所属する鷹取コミュニティーセンターが協力してくれるということで、この２つと協力しながら番組を作っていきました。

まず、真陽子ども会と行った子どもたちのメディア活動ですが、真陽たんけん隊という名前をつけまして、真陽の子どもたちが、その真陽のまちを探検しながら、取材をして、それをビデオで１つの番組にして世の中に発信していくというものです。

もう一つ、鷹取コミュニティーセンターというＮＰＯと協力してつくっている活動が、在日外国人青少年が発信する映像サイトづくりという活動です。これは在日の子どもたちが、その子どもたちから見た社会であるとか、社会問題とか疑問とかを発信していくというものです。

実施スケジュールですが、私たちは平成13 年７月からこの事業に本格的に着手しました。そこから子どもたちをサポートするボランティアスタッフの募集を始めまして、彼らに対する研修を事前に行った後に、まずは８月の夏休みに真陽たんけん隊の第１回の活動をスタートしました。そして番組を作り終えた後に真陽たんけん隊のホームページを開設しまして、そのホームページから子どもたちが作った番組というのを見れるような形にしていきました。

そして、真陽たんけん隊の番組発表会も行いまして、地元のお父さん、お母さんを初め、50 人ぐらいの方がその発表会に来てくれまして、大盛況のうちに幕を閉じました。

在日外国人児童に対する映像作成講習会などを開きまして、こちらの方はまだ番組ができていないですけれども、現在、数人の児童がビデオで番組を作ることの勉強を続けているということです。

明日になるのですが、３月 10 日、真陽たんけん隊の本年度最終の発表会が控えています。

まず、真陽たんけん隊で作った番組を紹介していきたいと思います。作品１が「バラソースをみんなで取材」という作品です。これは、真陽のまちにお好み焼きソースで有名なバラソースというソースを作っているお店があるんですけども、そちらの方、子どもたちが行ったことない、今まであることは知っていたんだけども、実際に行って、お店の人とはしゃべったことはないということで、子どもたちと一緒に取材をして、それを紹介する番組を作りました。

作品２が「地下鉄海岸線完全レポート」という作品を作りました。こちらの方は、長田真陽地区にも地下鉄海岸線が通ってまして、新しくできた自分たちのまちの地下鉄を、特に男の子たちは興味があるみたいで一緒に取材に行きました。

そしてこれが一番最新の真陽たんけん隊の作品になるんですが、「小体連をなくさないで」という番組を作りました。小体連というのは、学校の課外活動として、神戸市で行われているスポーツ活動でして、これは全市的にやられているものです。それが来年度から週休２日制になるということ

で、この小体連の活動がなくなってしまうということなんですが、それを子どもたちが、この活動をなくしてほしくないということで、番組を作ったというものです。

真陽たんけん隊の方ですが、先ほども申し上げましたが、作られた作品というのは、ホームページでの発信と地域での発表会での公開ということで、アウトプットの場を設けました。

そして、在日外国人青少年が発信する映像サイトづくりですが、こちらの方は、現在番組の制作の研修中です。在日ベトナム人の女の子とか、あと在日ペルー人の子とかが活動に参加して、今ビデオ作品を作る練習をしています。

真陽たんけん隊の成果物ですけども、本年度は映像作品が３本、そしてそれを発表するホームページが１つできました。そのほかの事業成果としては、子どもたちと地域のつながりが強化できたということです。子どもたちはまちの中で取材活動することによって、これまでつながりのなかった、しゃべったことのなかったような人たちと
も顔見知りになることができましたし、いろんな地域のよさとかを知ることができました。そういった意味で地域とのつながりが強化できたと思っております。

あとは共同作業を通した社会性の育成ですね。番組を作る過程においては、台本を作ったり、取材に行ったりするその中で、子どもたちはお互いの意見を受け入れたり、違いを議論しあったりしながら、社会性というのを育てていきました。あとは自らの視線で情報発信することのできる社会参加ということで、これは番組を作って、社会に自分達も、子どもでも提言していけるんだということを彼らは学びました。

在日外国人青少年が発信する映像サイトづくりですが、こちらの方はまず、彼らが安心できる場所を見つけたということです。それはどういうことかというと、これまでやはり学校とか社会の中で、自分が在日外国人ということで、いろいろと内面の中で抱えるものがあった子どもたちも、ここに来れば安心して迎えてくれる大人がいるということで、そういった安心した場所を与えることができました。

そして彼ら自身が、そのビデオを持って発信していけるんだということに、今練習をしながら気付きつつあるので、そういう意味で子どもたちが自らの存在に自信を持つきっかけになっているのかと思います。

今後の活動ですが、今やっと今年１年間活動してきまして、子どもたちも映像づくりに慣れてきました。私たちもお互い協力して事業を進めていく団体との関係がいいものになってきましたので、今後、本事業を継続して更に番組を作っていくことによって、子どもたちによる社会変革活動につなげていきたいと思っています。

発表の方は以上で終わらせていただきますが、真陽たんけん隊の子どもたちが作りました映像作品を１本皆さんにご覧いただきたいと思いますので、ちょっと時間を５分ほど頂戴します。

（ビデオ上映）

○小川

以上で映像の方は終了です。こういった映像をこれからも作っていきまして、子どもたちの意見を社会に発信していく活動を続けていきたいと思いますので、よろしくお願いします。以上です。

（拍手）

○事務局

どうもありがとうございました。

サントリー株式会社の佐藤友美子様が到

着されましたので、ご紹介いたします。
　発表が終わりましたので、ご質問をお願いします。
○速水
　今の映像づくりもそうですけども、子どもたちがつくり上げていくということですよね。子どもたちが話し合うというのは、そんなスムーズに進むことではないですよね？
○小川
　はい、もちろんそうです。
○速水
　そのことに対して、例えば真陽子ども会の大人の人だとか、皆さん方スタッフが心がけた活動というのは、どういったことだったのですか？
○小川
　なるべく子どもたちが、今何を考えて日々暮らしているのかとか、どういう疑問を持っているのかとか、そういうのを引き出すというのは、なかなか大変なことで、本当に私たちも腰を据えて、うちは若いボランティアのスタッフが主にこの事業に携わって、子どもたちと一緒に番組をつくっているんですけども、ともに子どもの視線に立って、子どもの気持ちになって考えながら、一緒にうまいこと子どもの心を引き出してあげる場を、引き出しやすい環境をつくってあげるということにすごく力点を置いたんで、本当にもう番組のテーマを考えるときは、子どもともう膝を突き合わせて何時間もしゃべりながら、こんなことを思ってんねんとか、こんなこと嫌やねんとか、そういうことを聞きながら、ああそうなんや、そんなことを考えてるんや、というのを共感しながらやっていきました。
○清水
　今のお話も関連しますけど、例えば小体連がなくなるというお話で、校長先生にお尋ねをすると、いや、５日制になるからと。担当の先生も、いや５日制になるからと。大人の側の理由というのは勝手やねというのが本当によくわかる。子どもたちの側は、そんなシステムの問題どうでもいいから、私らがサッカーやったりする遊びの機会が減るという。学校は小体連を例えば健康のためとか、体力向上とか、子どもたちの社会教育の一環というふうに多分考えているけども、素朴に子どもたちにとっては、遊ぶ機会が減っていくという認識があることを、僕はもっともっとクローズアップしたらよかったなと思うし、そういうことの対比が面白かったという感想が１つです。
　あと、地域の大人の人たちはたくさんご覧にいらっしゃったと、さっき言ってましたね。どんな感想というか、周りの人たちはご覧になってました？　うちの子供がビデオ映ってるわ、みたいな感覚ですか？
○小川
　それがまず最初に、一番大きなことでして、お父さん、お母さんは自分たちの子どもが画面に映って、レポーターをもう一生懸命してる姿を見るだけでも、もう皆さん本当に大喜びで大盛況という、拍手喝采みたいな感じだったんですけども。まだ今見てもらった小体連のこの番組というのは、実は発表会が明日なんですね。その中で、作品の発表をするというよりは、子どもたちが地域の大人に伝えたい他校との交流のスポーツ活動であるとか、そういうトーナメント戦をしたいだとか、そういう子どもの要望を聞いてもらう場ということで発表会の場を設け、発表会をそういう位置づけにしたいということで、明日はやろうかなと思っています。
○清水
　できれば先生方からは、土曜日だからといってできないことはないんや、みんなで集まったらサッカー何ぼでもできるやん、

みたいな話を出してくれたらよかったのになと思ったら、誰も言わへんかったね。
○小川
　それがジレンマだったのかなというところですね。
○清水
　その辺を地域の大人の人たちに気づいてもらって、土曜日にサッカーやりたい子だけ学校で集まって何かしょうか、みたいなのが出てくると面白いけどね。
○小川
　それがこっちのねらいというか、それが子どもたちが大人に自分たちの意見を発して、大人を動かすという活動になっていくと思うんで、そこがねらい目です。
○清水
　その辺、そう行きたい方、余り溝を掘り過ぎてやらないほうがいいのかなと思ったりもするし、難しいところやね。
○佐藤
　このビデオを見せてくださったのは、この作品がいいからだ、と思うんですが、やっぱり子どもたちを乗せていくときに、ただ楽しいかとか、ただ広がるとかいうだけではなくて、あるぶつかる部分みたいなのが必要なんじゃないかなと思います。この小体連をなくさないというのは、あんまりぶつかっているようにはなかったですけど、本質的にはいろいろ問題があると思うんです。そういう問題をとらえたときに、子どもたちは、それを何かしていくことによって、ブレイクスルーするような力というのができてくると思います。こういうの楽しいけど、テーマの設定の仕方というのは、実はすごく難しいですね。
　そういう意味ではこういう１つ新しいテーマが見つけられたことはすごく面白いなと思いました。
　これは学校の中でもこういう活動がよくあるんですけど、テレビに出たとか、楽しいとか、割とそういうのだけで、普通終わってしまってると思うので、いいテーマを作られたなと思いました。
○小川
　どうもありがとうございます。

○事務局
　それでは、引き続きましてワールドキッズコミュニティの小島さん、発表の準備はよろしいですか。それではお願いします。

○小島
　こんにちは。ワールドキッズコミュニティの小島祥美です。
　私たちは、こちらの助成をいただきまして、「地域でのスポーツと異文化交流による青少年育成」と題しまして、多様な背景を持つ青少年たちが違いに恐れることなく、自己のアイデンティティーを確立する環境づくりと、日本人の青少年たちに対しても異文化に接する機会を提供する、という２つを目的にして事業を行いました。
　事業の実施期間ですけども、2000 年６月 10 日から現在も引き続き行っております。
　実施内容ですが、３点あります。１つはサッカー教室です。毎週日曜日に行っています。そして、２点目はサッカー大会の開催、３点目がサッカー合宿の開催です。
　では３点の実施内容を報告いたします。まずは、サッカー教室です。毎週日曜日、サッカー教室を開催しました。実施回数は計 34 回です。毎週日曜日午後１時から４時まで開催しました。サッカーコーチとして、プロのサッカーコーチ、日系ブラジル人の方にお願いし、指導をしていただきました。
　場所の提供ですけども、地域にあるマリスト国際学校に協力をしていただき、学校の体育館を利用させていただきました。

その他、外国人の青少年育成ということで、多様な外国人が毎週教室の方に参加します。そうしたコミュニケーションの摩擦が生じないように通訳ボランティアにも協力していただきまして、教室の方は実施しました。

教室の一場面です。厳しいコーチのもと、練習に取り組む姿ですけども、より詳細な状況を知っていただきたいと思いまして、ビデオの方を上映させていただきます。

こちらは、県の方で取材に来ていただいたときに、サンテレビの方で放映された番組の一部です。

（ビデオ上映）

○小島

よくわかっていただけたかと思います。

事業の２点目ですが、サッカー大会です。地域の方やボランティアの協力を得まして、サッカー大会を開催しました。参加チームは 10 チームです。ブラジルチームですとか、ペルー、ボリビア、日本、アイルランドなどインターナショナルな大会を実施することができました。このときの大会の状況は、インターナショナルプレスという国内で発行されておりますポルトガル語新聞があるんですけれども、そちらの方でも取り上げて紹介されました。

こちらがサッカー大会のときの一場面です。大会に参加した青少年たちの友人とか、家族なども多く応援に駆けつけて大会が大変にぎやかに開催できました。大会後は、最優秀選手賞とか特別賞なども設けたこともあり、各賞の発表のときには、各選手も緊張した様子で発表の様子を伺っていました。

３点目のサッカー教室です。台風の接近により、時間とか場所を予定より変更いたしましたが、大変充実した合宿を実施することができました。先ほどの子どもたちでおわかりのように、ブラジル人の子どもたちが多いということから、ブラジルの代表的なお料理、シュハスコというんですけど、そのお料理を合宿に参加した日本人の青少年とか、ボランティアのスタッフに紹介するなど、食からの国際交流も実施することができました。

本事業からの成果としまして４点上げられます。

１点目は、地域にあるフットサルチームとの対抗試合、先ほどのビデオにありましたように、尼崎とか、明石とか、姫路の方とか、多くの方々に対抗試合に参加していただいたんですけども、そうしたかかわりからスポーツを通じ、ともに楽しみながら、準備、作業を行うことで青少年たちが国籍や年齢、性別にかかわらず異文化に対する理解を養う機会が提供できたかと思います。

２点目です。地域に暮らす外国人の青少年たちは、本事業参加から新たな仲間や居場所を発見することができまして、自信がつき日本人でないことに気遅れせず、堂々と自分の国のことを語れる機会がふえ、アイデンティティー確立へ助力できたかと思います。

３点目ですけども、私どもの団体で実施するイベントとか、地域にあります関西ブラジルコミュニティの活動に積極的にこのサッカー教室に参加した子どもたちがかかわるようになるなど、地域の同じ立場の子どもたちのリーダーとしての責任感を養い、コミュニティの自立に対し前進したかと思います。

４点目です。本事業により、フットサルチームが誕生したこと、そして地域のリーグに加盟したことで地域に暮らす同世代の青少年との交流ができ、異文化に触れ合う

きっかけが提供できたかと思います。

また、定期的な練習の成果が発揮され、そのリーグ戦で優勝するなど、青少年育成に大きく貢献できたかと思います。大変驚いてしまうくらいの大差で、このフットサルリーグで優勝いたしまして、そのリーグの模様がホームページでアップされるなど、子どもたちにとって大変有意義なきっかけができたかと思います。

今後の問題点、課題点ですけれども、多様な文化背景、言語背景を持つ青少年たちと一緒に作業をすることは、予想以上に体力と柔軟な態度が求められます。多くのボランティアに支えられ、運営を行ってきましたけれども、臨機応変に対応できるボランティアスタッフの人員確保が厳しいのが現実です。従って、地域社会で市民活動参加が叫ばれる中、ボランティアスタッフを育成する場づくりや、今後、そうした場づくりというのが必要かと思います。

また、地域住民がボランティアを希望した際に、適切に活躍できる場の提供ということも必要かと思います。

そして、今後の取り組みですけれども、本事業の成果を生かしまして、今後も可能な限り、彼らたちの活躍できる場、技術向上の場に協力していきたいと思います。

また、地域とのかかわりや広がり等、今後も生かしまして、異文化交流の輪を広げていきたいと思います。

そして、最後ですけれども、本事業で成長した青少年たちが次世代のコミュニティのリーダーとして育っていくように今後も支援活動を実施していきたいと思います。

ありがとうございました。

（拍手）

○事務局

どうもありがとうございました。発表が終わりましたので、ご質問をお願いします。

○上地

異文化、特に日本における地域レベルでの異文化交流というのは、これからの２１世紀の大きな課題だと思いますけれども、そういう面でブラジルという文化を背景にした青少年、子どもたちが、兵庫県の中でああいう活動を通してうまく日本への文化への適応という、それを援助されてるボランティア活動、大変意義があると思います。

それで、こういう交流というのは、私はキッズと言ってましたけど、その後、教室をみると何かヤングという感じがあるんですけど、子どもたち、もうちょっと若い世代というのは、異文化交流というのは、若けりゃ若いほどすごく大事だと思うんですよ。

それと日本の子どもたちとのもう少し文化的な交流、日本というか、もちろんブラジルの方も、もう日本と思ってると思うんだけど、もう少しその辺の交流が今後もっと盛んになったら。というのは、僕は日本で育った子どもたちそのものが学ぶべき点がすごく多いと思うんです。ブラジル文化とかああいう中で。今後、そういうコミュニケーションを通さないと、日本人というのは、これはどうも国際的になっていけないと思うんで、その辺どうなんでしょう、可能性というのは。もっと日本人を引き込むようなコミュニケーション、そういう活動というのは？

○小島

私たちの方は、機会を提供をしているんですけれども、日本の子どもたちが入るのが、なかなかその一歩ができない状況かと思うんですよね。なので、学校教育の場ですとか、そういったところにもう少し私たちも介入できたら、というのを来年度の課題にしてるんですけれども。そうした日

常、地域にどんな人たちが住んでいるのか、どんな背景の子どもたちや歴史的なものを持ってきてるのか、そうしたものを教育の場とか、またその子どもたちのお父さん、お母さんも多分、知らない状況かと思うので、そうした部分で言葉悪いですけど、啓発ということをできるような機会ができたら、と思っております。

あと毎年行っているんですけれども、地域での外国人の子どもたちのお祭りとか、そうしたものにもう少し日本人の人たちも介入してもらいたいな、ということと、あと幸い今年 2002 年度のワールドカップもありますし、ブラジル人たちは6月にブラジルチームはこっちに勝ち進むらしいんですね、予想ですと。彼らがそう言い切ってるんですけども。そうしたイベントにうまく乗り込んで、もう少し日本の人たちが、日本に来日する外国人チームたちに興味を持って、そこから異文化というものに対してすんなり入れるような機会が提供できたら、というのが望みです。

○清水

サッカーが強くなって、そして優勝するということはとても大変なことで、価値のあることだと思います。その一方で、とても強いチームになるがゆえに、上手な人しかプレーができなくなるグループ活動になると、やってみたい子どもたちに、こう裾野を広げるときに、これから違う意味で配慮がいるかな、という感想を持ったんですね。そのことと、チームが強くなっていくということの成功というか、目的と同時に異文化交流もしくは、そのコミュニティリーダーに彼らが育っていく云々と、こうありましたから、その彼らが今度いい選手からいいコミュニティリーダーになっていくための仕掛けと言えばいいんですか。例えば、皆さん方の裏方をすることだって、要するにあなたたちのパートナーになるようなことを、僕らはボールを蹴るために来たんだじゃなくて、ボールを蹴りたい子どもたちに教えるリーダーになったりとか、何かそういう形の仕掛けが、多分これからたくさん考えてらっしゃるんでしょうけど、そんなことですか？

○小島

はい、そうです。保健になってしまいますけど、チャイルド・トゥ・チャイルドというふうな、今言葉が出てますけども、そうした子どもと同じ環境にあるようなリーダーが、自分たちの次世代を担っていく子どもたちに対して、指導できるような場づくりというのを今後必要かと思いますし、私たちにとっても課題だと思います。継続的に彼らが活躍できる居場所というのか、いられるような場というのもなかなか少ないかと思うんですけれども、そこをもっともっと広げていって、活躍できる場というのが提供できるような支援を行っていきたいと思います。

○清水

強さがシンボルであって、強さが特定の人たちだけの活動になっていかないようなことだけ配慮していただいたらうれしいね。

○佐藤

私も見せていただいて、ちょっと子どもたちがお客さんになってるのかなと。スポーツするのが楽しくて、アイデンティティーの確立はできているけれども、主体性がどこにあるのかなというのは、ちょっと感じました。

お客様から本当に主役になって、リードするような次世代のというのをおっしゃったので、多分そういう芽がもう見えてるんだと思うんですけれども、ぜひその辺を引っ張っていただけたらな、と思いました。

それともう一つ、この課題のところにありましたけれども、ボランティアというの

が結構難しかったということですが、具体的にはどういうようなことが起こってるんでしょうか？

○小島

皆さん、異文化に触れたいということが、近年のキーワードかと思うんで、少し言語に興味があるので、ボランティアをしたいとかおっしゃられて来る方がたくさんいらっしゃるんですけども、だけどそれを継続的にするということは、１つの興味範囲で入ってしまうとなかなか継続的にいけないというのが、今実情であるんですね。なので、そのボランティアの人たちが、彼らが参加するということに対して、ボランティアのスタッフに対して、モチベーションをもっとアップするような、そうした場というのが今後必要かなというのを活動してて感じました。

○速水

今おっしゃったお話、臨機応変に対応できるボランティアのスタッフの人員確保が難しいと。一方では、地域の住民がボランティアを希望したときに何をしてもらっていいかわからないという。片方では不足してて、片方では活動する場がないという相反したものが１つの課題の中で出てきてるというのは、現状としてはよく理解できるんですけど、不思議な感じがするわけですね。

というのは、このワールドキッズコミュニティの中で、ボランティアに対して何を求めてるかということを、はっきり出されているのかどうかということですね。それに応じてボランティアがどうかかわってくるかということで、来た人たちに何をしてもらうかということを、もう少し鮮明に出してもらったら。

先ほどの語学の部分でもそうですよね。語学をあなたがそこで自分の持っているものとか、学習もひっくるめてやろうとするのであれば、それは大いにやってもらったらいいけども、私と子どもを求めている活動というのはこうですよ、という出し方で出されると、もう少しボランティアも具体的に自分ができるものを求めてやって来られるし、それからそこでボランティアとしての皆さん方の活動の中での居場所も見つけることができるのと違うかなと。その辺がこの課題の中では、少し相反するものがあったような課題になってるので、もう少しその部分を整理されるともっといろんな方に支えられてできるのかなと思いました。

○小島

はいわかりました。ありがとうございます。

○事務局

引き続きまして、ブレーンヒューマニティーの三浦さん、発表の準備はよろしいでしょうか。それではお願いします。

○三浦

このたびは、当会の事業に助成いただきどうもありがとうございました。今から今回助成をいただいた「子どもたちの稲作体験支援事業」の報告をさせていただきます。あと、事業計画書に基づいた事業評価やアンケート集計などは、お手元にある報告書の方に詳細に記してありますので、そちらをご覧になられて、本日は事業の様子を中心にお伝えしたいと思いますので、よろしくお願いします。

本事業は、大きく分けて４つのイベントにより構成されております。まず田植え、そして草刈り、キャンプ、最後に稲刈りです。稲刈りの後には、自分たちでつくったお米を自分たちで食べるという経験もできます。というふうに、稲作を始めから終わりまで体験できるプログラムになっております。

一連の稲作は、滋賀県高島町畑地区の棚田で行われました。稲作体験を通じて、滋賀県の子どもと阪神間の子どもたちの交流を提供する機会でもありました。

それでは一つ一つのイベントを見ていきます。まず田植えですが、このイベントから滋賀県の子どもたちとの交流が始まります。当初はなかなか打ち解けず、よそよそしさも見受けられた阪神間、高島町の子どもたちでしたが、高島町の子どもたちが阪神間の子どもたちに田植えの方法を教えるなどするうちに、少しずつではありますが、お互いに打ち解けているようでした。田植えそのものに加え、子どもたちは泥の感触を楽しんだり、田んぼに生息する生き物を観察したりすることで、自然のすばらしさを再発見しているようでした。

これは、田植え後に行われた川遊びの様子です。５月ということもあり、水もまだまだ冷たかったようですけれども、子どもたちは清らかな水の中で裸足になって直接水の感触を楽しんでいました。イモリや亀など都会では余り見ることのできない生き物と出会うこともできました。

子どもたちは、水の冷たさに慣れてくると、水のかけ合いなどを始め、川から上がるころにはスタッフも子どもたちもみんなびしょ濡れになっていました。

次に草刈りです。１ヶ月で伸びに伸びた田んぼのあぜ道の草を使い慣れない鎌を使って刈り取りました。決して楽しいだけの作業ではなく、しんどい作業ではありましたが、稲作には欠かせない作業の１つでした。

次に稲刈りの後に実施した案山子づくりです。地元の案山子づくりの名人の方に教えていただきながら、計５体のさまざまな案山子ができ上がりました。針金を曲げたり、わらを巻きつけたり力を使う作業が多かったのですけれども、子どもたちは夢中になって取り組んでいる様子でした。このとき制作された５体の案山子は、９月に実施された稲刈りイベントの際に地元の祭で行われる案山子コンテストにも出展されました。

キャンプの１日目に行われたのが、自然散策です。棚田のある畑地区のお隣、高島町黒谷地区の山里を班ごとに散策しました。ここでは、地元の子どもたちのホームグラウンドということもあり、自然と現地の子どもたちが阪神間の子どもたちに、土地を案内するという形になったのですけれども、そのようなこと自体が今、都会に住んでいる子どもたちにはなかなか体験のできないことだったので刺激だったと思います。

地元の農家の方々とスタッフが協力してつくったバーベキューをみんなで食べました。自然の多い農村で、しかも野外でいただくバーベキューの味に子どもたちはみんな大満足の様子でした。

そして、バーベキューが終わった後には、待望の花火大会です。子どもたちは、開始の合図とともにさまざまな手持ち花火を分け合って、その美しさに見入ったり、スタッフの点火した打ち上げ花火に見とれるなど、思う存分花火を楽しんでいた様子でした。

キャンプのメインイベントでもある琵琶湖でのカヤック体験は、子どもたちがキャンプの中で一番熱くなったときでもありました。ほとんどの子どもたちが初めての体験で、上手にできるのか緊張していました。最初は、陸上でのパドリグ練習を行い、小さい子どもにとってもカヤックで使用するパドルは、自分の背丈よりも長いものであり、慣れないうちは扱い方にとまどっていました。

ライフジャケットを着て、いざ乗船です。最初にスタッフと一緒に乗って練習し

た後、子どもたちは一人ずつカヤックに乗り込みました。一生懸命、慣れないパドルを操って練習した結果、全員が上手に乗りこなせるようになりました。最後は、カヤックでレース大会、２人１組で乗り込み、沖を１周してくるハードなコースを競い合いました。

余った時間で琵琶湖での遊泳を楽しみました。海ほどではありませんが、琵琶湖にも琵琶湖独特の波や匂いがありました。遊泳しながら、子どもたちはそのような琵琶湖の自然を感じてくれたことだと思います。

夜の琵琶湖を見ながらのキャンプファイア、炎を囲んでさまざまなゲームで盛り上がった後、燃え上がる炎を見つめながらしみじみと語り合い、この琵琶湖キャンプを振りかえりました。

キャンプファイアの締めくくりとして、このキャンプファイアのテーマソングをみんなで歌い、最後の夜を楽しみました。

キャンプ最終日には、このキャンプでの思い出を何か形にして、子どもたちに持って帰ってもらうため、琵琶湖湖畔で拾い集めた石を使って、石ころペインティングを行いました。石ころを何かに見立てて、色を塗っていきました。なかなかよいアイデアが浮かばなかった子もいましたけれども、慣れてくると次々とスタッフを驚かせるような作品をつくり上げていきました。

このキャンプは、いわゆる普通のキャンプ場で行うキャンプとは違い、他県の子どもたちとの交流あり、カヤック体験ありと異色のイベントづくしでしたけど、その中で、子どもたち同士もさらに友情を深めてくれたことだと思います。

５ヶ月の間で大きくなった稲を農家の方の指導のもと、草刈りで少しは使い慣れた鎌を使って刈り取りました。自分たちで植えた稲を、また自分たちで刈り取るという作業は、子どもたちにとって本当に楽しい作業でした。

自分たちで刈り取った稲を昔ながらの足踏み脱穀機を使って脱穀しました。実際やってみると、機械の回る速度が予想以上に速く、一瞬たりとも気を抜くことができず、子どもたちは必死に頑張っていました。

高島町の収穫祭である棚田祭にも参加しました。祭では案山子コンテストが行われており、子どもたちが草刈りのイベント時に作った案山子も出展されました。祭ではポン菓子や焼芋、大判焼などの屋台が並んでおり、子どもたちはそれらを思い出に回り、祭を楽しんでいました。

終わりに、我々スタッフは稲の生育とともに子どもたちの様子を見守ってきました。田植えから始まる連続イベント、稲作を体験していく中で高島町の子どもたちとの交流も深まってきました。はにかみが完全になくなったというわけではありませんけれども、子どもたちは、いつもとは違う他県との子どもたちに親しみを感じたことだと思います。

今回の一連イベントで築かれた阪神間の子どもたちと滋賀県の子どもたちとのネットワークをさらに深め、広げていくため、また農業体験の機会の提供をさらに継続させていくため、来年度も事業を継続、発展させていく予定です。

どうもご静聴ありがとうございました。(拍手)

○事務局

どうもありがとうございました。

発表が終わりましたので、ご質問をお願いします。

○上地

野外体験活動というのは、これからの子どもたちの非常に大事な活動というか、教

育の場でもあると思うんですけれども。お聞きしてますと、皆さんがボランティアとしてやってる野外活動の特徴というのを、ひとつ他県との交流というのと、年間を通じて田植えから収穫と、しかもこれ試食されたんですか。もう一つは、これまで不登校とか、あるいは被災児童とかいういろんな活動をなさったようですけど、今回そういう子どもたちも含まれていらっしゃるんですか？

○三浦

当会では、ほかの事業部として不登校の活動とか行っていますけれども、今回は特別に参加してもらった子どもとして池田小学校の１年生の方を無料でご招待して、来てもらいました。今回、不登校の子どもたちは今回は参加していません。池田小の子どもたちは、事件があった後ですけれども、ほかの子どもたちと変わりなく十分に楽しんでたようでした。

○上地

そうですか。それにしても、こういう他県との交流、あるいは年間を通しての一環したこの野外活動というのは、これはなかなか子ども会とか、地域、学校にしてもそこまで徹底することはできないんです。

参加者はほとんど同じ子どもたちというように理解してよろしいんですか？

○三浦

そうですね、７割、８割方はリピーターで、最後の稲刈りのときはほかにもいろんな参加者が来られたんですけれども、そのどれかにかかわった参加者のみを抽選で選ばせていただいて、最後の稲刈りのときは全員リピーターで行いました。

○上地

なるほど。ですから、年間を通じたこういう活動に、非常に皆さんのボランティアとしての活動の中の特徴があるといいましょうか。それでも、これがすごく効果があるというか、こういう活動というのは非常に大事だと思います。ご苦労さま。

○速水

子どもたちがお米をつくるという体験ですけども、大学生のリーダーの人たちが主にはスタッフとしてかかわれたんですよね。スタッフの人たちがお米をつくるという体験は、これまでにどれぐらいされてたんですか？

○三浦

特にそういう体験は当会ではやっていなかったんですけれども、僕今日は代理で来ているんですけれども、主催者の田村というものがおりまして、その者が自分の体験をもとに、その田村という者は実家が滋賀県ですけれども、滋賀の自然を楽しんでもらいたいという自分の経験をもとに、子どもたちにもそういう思いを実現してほしいということで、それが発端となって始まりました。

○速水

子どもたちのお話、今聞きましたね。スタッフはそういうお米づくりを子どもたちとともにやって、どういう感想を持たれましたか？

○三浦

確かに僕らにとっても農業というのは、決して現在近いものとはいえないという認識を持ってたんですけれども、子どもたちと一緒に活動していく上で、やっぱり一番近くに感じたのは、自分たちの作ったお米を食べたときなんですよね。そのときにやはり決して遠いものではなく、もっと距離の近いものだという認識を持ちました。僕たちも改めて。

○速水

なるほどね。ありがとうございます。そういうふうにスタッフが子どもたちの気持ちを同感できて、一緒に取り組むことは非常に大事なことで、何となく体験もないの

にわかったような顔をしてつき合ってると、子どもはそれをすぐ見抜くというようなことで、今のお話で一緒に体験しようという気持ちよくわかりました。ありがとうございました。

○事務局

引き続きまして、神戸須磨北おやこ劇場の前田さん、準備はよろしいでしょうか。それでは、よろしくお願いします。

○前田

神戸須磨北おやこ劇場の前田と言います。若い方の中で、１人だけえらく年配なので恐縮しております。それから皆さん、コンピューターを駆使して発表する中、手づくりのものですけれども張ってある写真もご覧ください。後でビデオを流して、子どもたちの様子を見ていただきますので、少しだけお話をお聞きください。

まず、今回の事業は、小学校１年から３年生までの劇あそびと、小学校４年生からの劇づくり、それから劇づくりでつくり上げた作品の発表会という３つの事業で助成をいただいて活動していますが、今日は劇づくりの子どもたちの様子を主に発表として報告させていただきます。

劇づくりは８月からスタートし、ただいまは３月 23 日の発表に向けて練習しております。今日も 28 名の子どもたちが大人のスタッフと一緒に練習をしています。

劇づくりの開始に際しまして、地域の小学校に募集のチラシを配布しましたところ、17 の学校の子どもたちから応募がありました。

子どもたちの応募の理由はさまざまでした。表現するのが大好きな子、自分を変えたいからといって自ら申し出た子、おとなしいからといって親が少し背中を押した子など、個性あふれる子どもたちでした。

当初、子どもたちはぎこちなく自分の意見を言うのも消極的でした。が、８月から 12 月にかけての言葉遊び、即興劇など心と体を使ったワークショップを通じて、自己を開放し、コミュニケーションをとりながら仲間づくりをしていきました。

一番端っこにあるのが、劇づくりの様子です。その間、大人は決して否定しないことを基本にワークショップにかかわりました。

11 月には、子どもたちの意見や希望を取り入れてつくり上げた「魔法学校―満月の夜に―」という作品ができあがりました。魔法のほうきを求めて、人間界をさまよう魔法学校の子どもたちが、最後に力は自分たちの中にあると気づく物語で、まさに子どもたちがこの劇づくりの中で実感しているものではないかと思います。

さて、台本ができ上がり、役決めに入りました。配役も大人がするのではなく、子どもたちが台詞を言い合い、どうしてその役をやりたいかの理由をアピールしたりして互いに選びました。

ここで私たち大人では考えられないことが起こりました。台詞の多い難しい役をほとんどの子どもたちが希望したのです。おとなしい子やそれまで余り大きな声が出せていなかった子どもまでもその役に挑戦しました。それは、その場が決して自分を否定されない安心して自分を出せる場になっているということの表れだと思います。

結果、中学生が出番の少ない役になったり、一番年少者が難しい役になったりもしましたが、脇役に回った中学生も決してくさったりはしないで、その役を受け入れ、役を工夫することや、年少者をまとめることで自分を出し切り、難しい役を選んだ年少者も自分が持てる力を十分に発揮できるまで心を開放していきました。

２月に入り、１泊２日の合宿をしました。合宿の様子がここにあります。学校と

家庭の中間ぐらいのルールが存在するお泊り会は、子どもたちにとって一段と仲間意識を深める機会となりました。

今、ルールと申し上げましたが、私たち大人がずっと心がけていることがあります。それは、必ず子どもたちとの話し合いの場には、大人も劇づくりの仲間の一員として同じ立場で話し合いに加わることです。演技指導のダメだし以外は大人が指導的に意見を言うことはありません。問題はすべて子どもたちとの話し合いの中で解決していきます。そして、このことは大人にとっても、子どもたちの自立の力を信じることのできる学びの場になっています。

ここで何人かの子どもたちのエピソードをお話します。外国で育った小学生の女の子は、外国で自分の意見をはっきりいうという教育を受けて育ちましたが、日本の学校ではそれが受け入れられず、学校に行き渋るようになっていました。ところが、劇づくりの仲間に出会った彼女は、劇づくりではみんなも自分の意見をはっきり言うから、自分だけが批判されることはない。だから、行くのが楽しいと家で話しています。

頑張り屋のＴちゃんは、学校の頑張れ、頑張れという指導に頑張り続けています。ときどき手も出る熱血漢の先生にも少し息苦しさを感じています。彼女は、自分とは性質の違う何でもはっきり意見を言う気の強い役を演じることで、学校とのバランスをとっているようです。

さて、おとなしいからとお母さんに背中を押し出された子どもたちはどうなっているでしょう。彼らは、確かに時間はかかりましたが、本来の元気さでときにはやんちゃをしながら、仲間に溶け込むことができました。今では、大きな声が出るようになり、演技も工夫する余裕が出てきました。

裏方に回っている中学生の女の子の活躍もめざましいものがあります。彼女も学校には自分の居場所が見つけられないのですが、劇づくりでは小学生に慕われ、みんなのまとめ役になってくれています。

緊張すると吃音の出る女の子もこの場が安心できる場だとわかっているので、言葉もスムーズに出、自分の意見も言えます。

このように 28 人の子どもたちそれぞれが、自分の持てる個性を発揮する場となりました。私たち大人はまたしても子どもたちの可能性を信じる良い機会となりました。

最後になりましたが、劇団四紀会の方々には、私たちのこの取り組みを理解し、協力してくださっていることに感謝しています。両氏は子どもたちを信頼し、多くを子どもたちに任せることで子どもたちの自主性を引き出し、その力を最大限に発揮させてくださっています。

子どもたちの個性は、子どもたちが命名した劇団名「星くずの星」のようにきらきら輝いています。この劇づくりで自分に自信をつけ、コミュニケーションの力の向上した子どもたちが、学校や地域でもその個性を発揮できることを祈ってやみません。

お手元に３月 23 日の発表会のチラシをお配りしました。是非、新長田ピフレホールでの発表会で子どもたちの笑顔をご覧ください。ありがとうございました。

５分ほどビデオを見ていただきます。

（ビデオ上映）

○前田

ありがとうございました。

○事務局

どうもお疲れさまでした。発表が終わりましたので、質問をお願いします。

○佐藤

今、見せていただいて、やっぱり学校とかが息苦しくって、こういう場を子どもたちは欲しがっているんだなということがわかりました。こういう場はすごく楽しそうでいい場だと思うんですけど、学校に帰れるのかしらと、逆にその辺のつなぎというのは何か考えてやってらっしゃるんですか？

○前田

そこまでのフォローを私たちができるかどうかというところまではわかりません。確かに子どもたちの中で学校に行けていない子が２人います。それから、学校でいじめを受けている子たちも２人か３人います。でも、それを特別な方に、私たちは特別な子として見ていないので、全然問題のない子どもたちと同じように私たちは扱っています。戻っていけるかどうかについては、「特別なもの」と私は考えていないので、ここが居場所になっていればいいなと考えています。

たまたまなんですけれども、きのう学校に行けていない子どもと、学校でいじめを受けている子どもの通っている学校にチラシを持っていきました。そうすると校長先生がとても喜んでくださいまして、その２人の子どもたちが学校に行きにくいということを、校長先生もご存じでして、彼女たちにこの場があることがとてもうれしいと言ってくださいましたので、きっと何かそこで生まれるんではないかと思いました。

○上地

学校以外にこういう居場所があるという、それと今その学校以外のインフォーマル集団といいましょうか、それは学習塾ぐらいですよね。ですから、こういう場というのは、本当はすごく大事だと思いますね。それと一人一人の説明を聞いてると、それぞれの個性をちゃんと見守りながら、自主的に役を子どもらに希望で決めてやってるその雰囲気、まさにそれがボランティア的な１つのかかわり方だろうと思いますし、今の子どもたちの一人一人の意見を聞きながらやっていく、あの辺は僕はやはり、これからすごく大事な子どもとのかかわり方ね、ボランティアの集団としての非常にいいことをやっておられるという感じを受けましたです。ご苦労さまです。

○速水

先ほど、佐藤さんのおっしゃられたことと共通してるんですけども、僕は子どもたちの居場所になることは大事だと思うんですね。だけども、そこの姿を例えば家族だとか学校が知ることというのがものすごい。それがどうできるかとは別にして、反対に家庭とか学校での姿をここで知るということも非常に大事なことですけども、そういう取り組みというのは何かされてますでしょうか？

子どもの姿を、誰々ちゃんがどうのということではなくても、みんながこんなことをしてますよ、ということを知らせることとかはありますか？

○前田

先ほど言いましたように、３月 23 日に発表会をしますので、それに向けて今各学校にチラシを配布したり、区役所や社会福祉協議会にごあいさつに行っています。この場を借りても宣伝したいなと思って持ってきたんですけども。

でも決して発表会だけの、劇が出来上がったということだけの評価を受けてしまうというのはちょっと心配な部分があるなというふうに思っていまして、一番初めに発表のあったビデオの制作の方と同じで、我が子がそこに載っているということだけが評価されるというのを私たちは望んでいることではなくて、８月から３月までの、子どもたちの集団づくりというところに私たちは力を入れていますので、本当ならこの

まとめにも書いたんですけれども、練習のその場をずっと見てくれる大人がたくさんいてくれることが一番望ましいと思っています。

○清水

自己表現にためらいを持っている子どもの一方で、すごく積極的な子どもも一緒になっているんだろうと思います。今のビデオの最後の方あたり見せていただいたら、もうほとんど遜色ないというか、要するにそれぞれの子どもらが、それぞれの子どものままでいるという、劇のでき味よりもこのプロセスの方が正にこの活動というか、事業にふさわしいというか、あるいは見ていただくのにふさわしい部分かな、と思いました。１つだけ最後にご質問、演劇をやってらっしゃった？

○前田

いいえ、全くやっていません。

○清水

なるほどね。で、おやこ劇場をお始めになったきっかけはなんですか？

○前田

私がおやこ劇場に入会したきっかけですか。子どもたちにまず生の舞台を見せてあげたいということと、お隣のおせっかいなおばさんに誘われたというのが第１の原因です。そのおせっかいなおばさんの中身をいいますと、私が孤立した子育てをしていたので、みんなで子どもを育てましょうというふうに誘われました。

○清水

要するに劇が手段なんですね？

○前田

そうです。手段です。

○清水

わかりました。

○事務局

ありがとうございました。

最後になりましたが、子ども自然村フロンティア会の上垣さん、準備はよろしいでしょうか。それではお願いします。

○上垣

私たちは子ども自然村フロンティア会です。出石郡但東町にある野外活動施設、子ども自然村を中心に、子どもたちとのキャンプや、地域での環境学習などを企画、運営している自主的ボランティアグループです。

実施内容としまして、今回、阪神地域を中心とする兵庫県全域の小学３年生から中学校３年生の児童を新聞などを通じて公募し、平成 13 年８月 23 日から 26 日の４日間で小学生 38 名、中学生３名、スタッフ 23 名の合計 64 名が参加し、豊かな自然を持つ但馬の森、子ども自然村におきまして、電気やガス、時計を使用しない中、心と体、知恵を働かせ、生活や遊びを仲間とともに体験する「めちゃんこ楽しい遊び場づくり」を実施しました。

なお、当初は水道を使用せず、子ども自然村内に流れている川を生活の中で利用していく予定でしたが、台風の影響により水が濁っていたため、急遽水道は使用することとしました。今回は、子どもたち自身で課題や可能性を発見し、計画実行のサイクルをつくる重要性を感じること、また生きる力を引き出すことを事業のねらいにしました。

それでは皆さんに子どもたちが体験した場所へ、少しの間だけ足を踏み入れていただきたいと思います。皆さん、すみません、目を閉じていただけますか。

○山門

ではまず、体の力を抜いて、大きく深呼吸をしてください。あなたの目の前は真っ暗です。何も見えません。そしてとても静かです。おや、一筋の光が差し込み、東の空が少しずつ明るくなってきました。どう

やら夜明けのようです。真っ暗だった目の前には、太い根をしっかり大地に張り、青々とした葉を広げた木々が立ち並んでいます。この深い森の中で、鳥のさえずりも聞こえてきました。もっと耳を澄ませば、この森に流れる川の水の音もかすかに聞こえます。あっ、今、魚がはねました。惜しみなく注がれる朝の光を浴びて、森も活動を始めたようです。あなたも出遅れてはいられません。この大自然の自由な中であなたは今から何をしますか。

○上垣

ありがとうございました。目を開けてください。

子どもたちはこのような空間の中で、まず自分たちが何をしなければならないのか考えました。初めは何も出てきませんでしたが、そのうちにまず寝床を作ろうよと慣れない手つきでのこぎりや鎌を持ち、自分がこれから住むすみかをつくり出すグループや、何よりも「お腹が空いたわ」、と御飯をつくり始めるグループがいました。

なにもかも子どもたち自身で試行錯誤するせいか、いらだちを感じたり、仲間同士での衝突があったり、なかなかスムーズにはいきませんでした。全員で協力して夜中までかけ、やっとの思いでつくったカレーの味は、忘れることのできない思い出になったことでしょう。

このように初めに、食・住に追われていた子どもたちも、キャンプの中盤を過ぎると、余裕が出てきたのか、枝で作った竿で魚釣りをしたり、川遊びをしたり、無邪気な様子がうかがえました。生き生きとした子どもたち、みんなでともに過ごした時間の中で、私たちスタッフも含め、気づいたことがありました。

先ほどイメージしていただいたとおり、自然村の夜は本当に真っ暗です。キャンプの中の火は、明かりをともすためや、料理をするため、寒さをしのぐという役割を果たすと考えられてますが、ほかに火には人を集めるという、普段忘れているような効果もあったことに気づきました。また、時計がなくても、空の明るさや、風の匂い、静けさなどで、時の流れを感じられることも、大きな発見の１つです。

今回の成果として、私たちスタッフが重要視していた、プログラムのないプログラムに対する子どもたちの取り組みであると言えます。初めは大きな戸惑いや不安の中、グループや個人として、まとまった行動や有意義な行動を取ることができませんでした。

スタッフとしてそれは予測されることでしたが、あえて見守ること、ともに考えることを基本姿勢として、指示は出しませんでした。子どもたちがそのような混乱の時間を過ごす中で、グループ自身に、例えばどうすれば御飯が食べられるのか、お腹が空いたなあと思う、みんなにそれを伝えます、話し合います。じゃあ、どうすればこの自然の中でどうすれば御飯が食べれるんやろう。みんなで考えます。薪を拾ってきて火をつける。でも火があっても、鍋をかけるものがないと何もできません。ということをみんなで話し合っていった結果、ようやく薪を取りに行けたり、鍋をかける鉄棒を取りに行ったりと実行します。変化が見られるようになったんです。

つまり子どもの自主性であり、団結力であり、大変ユニークな発想が生かせたと考えます。実際、子どもたちと生活をともにして、彼らのたくましさ、生活能力の高さを感じました。その子どもたちの力を最大限に引き出すことができたことは、最大の成果であったと感じています。事業実施にあたり、問題点・課題は大きく分けて、安全対策、地域との交流、スタッフの資質の３点が上がります。

まず、安全対策についてですが、今回の活動のように刃物を持ち、やぶに入って生活の場を切り開いたり、照明のない夜の活動には危険がつきものです。今回なたで手を切った子どもや、転倒し肘や足に軽い捻挫をした子どもがやはり何名か出ました。幸い大事には至りませんでしたが、スタッフの安全に対する意識と、応急手当などの知識を身につけることが重要な課題だと認識しています。

次に地域との交流について。今回、地域住民との交流を考えていたのですが、実現することができませんでした。地域との連携を図っていくには、今後活動の幅をより一層広げていくとともに、但馬の文化に直接触れていく、体験を取り入れ、さらに子どもたちの発見や気づきを模索していきたいと考えております。

３番目にスタッフの資質についてですが、この事業では子どもとともに行動するスタッフの役割がポイントになります。今回班によって仲間づくりにばらつきがあり、その後の日程に影響が出ました。また子どもたちから自主性を引き出し、グループで協力した行動につなげるのはとても難しいことです。このあたりも班によってさまざまでした。そういう意味で今回のスタッフ研修は、今後への課題を残しました。

以上の点から、今後に向けて子どもたちへ更に充実した体験、時間、空間、仲間、の提供を模索していきます。最後に、「ＮＰＯボランティアグループによる子どもたちの体験活動促進事業」関係者の皆様方、そしてキャンプの企画、実施段階にて協力していただいた方々に厚く御礼申し上げます。どうもありがとうございました。

（拍手）

○事務局

どうもありがとうございました。

発表が終わりましたので、ご質問をお願いします。

○佐藤

今、課題のところで、スタッフの力量がいろいろだったというような話がありました。反省会もされたみたいですけれども、こういう時にじゃあ、どういうスタッフだったらうまくいってというようなことは、どうでしょうか、出てきてるんでしょうか？

○上垣

こういう場が初めてなもので、大変緊張しておりますけど、こういうプログラムをやるといつもそうなんですけど、スタッフのことで問題になって、今回このプログラムがないプログラムということに実は一番慣れてないのは、子どもたちではなくてスタッフでした。何かをしてあげなあかんであったり、今の若者もそうなんですけど、余裕がないんで何かをしようとしてしまう。

一番求められるスタッフというのは、寛容というか、ゆっくり構えられる、どっしり構えられるみたいなスタッフじゃないかなと思うんですけど。こういうプログラムで、御飯を一番食べたいのは結局スタッフの方であったり、子どもたちは最後の夜中まで遊んでるけども、「御飯作らへん？」、とずっと言うてるのはスタッフ。まあそういう意味では寛容なスタッフになるんかもしれませんね。

○上地

結局まさに機械化、あるいは情報化の、こういう高度な文明化された時代の弊害もかなり出てますよね。そういう中で皆さんが今回体験された、何か原始体験というよりも、生活の原点体験というのかな、すごく意義があると思うんですね。

それと先ほどのイメージですね、私うまく入れたんだけど、あれはやはりその場でもやられたんですか、子どもたちに？最

初、朝のスタートのときに？
○上垣
　やりました。
○上地
　あれ、やったんですか。先ほどやりながら、ああいうまずイメージから入って来る体験とていうのも、久しぶり。今の子どもたちは、ほとんど体験してない静けさの中でのああいうのも含めまして、私皆さんが今度体験された全く計画のない中から、子どもたちが自主的に生み出す１つの体験ですね、まさに人間の原点というか、これはもうかなり大事な教育だと思うんで、こういう子ども時代の体験というのはずっと残るんだろうと思いますので、非常に意義のあるいい活動だと思います。
○清水
　僕も野外活動一生懸命やる方なので、プログラムのないプログラムをやろうとするというのは、言葉としては正しいようで、実は随分間違っている言葉でもあるんですね。というのは、プログラムがないというのは、本当はだめなんですよ。だけど、従来我々がやってきた考え方のプログラムはやめる、ですね。というのはプログラムというのは経験を予測することだから。だから、その予測をやめるのではなくて、こういうことが起こり得るだろうなということを、このような経験をスタッフが積み重ねていきながら、子どもたちが自由に遊んでた。それは何から自由というものを実感したの？というその観察眼をスタッフが養っていかないと、自由と放任というのが紙一重ね、野放しね。起きたトラブルはなぜかという、そこのところは僕ものすごく難しいと思うけど、それを経験して積み重ねられたら、僕はものすごい力量のスタッフが生まれてくるし、自信を持って線を引いてないプログラムというのができるような気がします。
　必要なものは根気ね。そして、我慢や体力だね。お腹減っても言わない。何よりも時間がいるでしょう。最後は信頼。これ１つ抜けても僕はノンプログラムというのは、やりにくいというね。あとはキャンプの前にしっかり体力を整えて行くことだけだと思います。ありがとう、いい経験を聞かせていただきました。

○事務局
　これで５グループの報告が全て終了しました。ここで休憩を若干とりたいと思います。後ろの時計で、３時半から再開させていただきます。

（休憩）

○事務局
　それでは、これから講評者の方々から、５グループの活動に関する講評ですとか、今後のＮＰＯ・ボランティアグループによる子どもたちの体験活動を実施するにあたってのご提言なり、ご意見なりを頂戴したいと思います。各先生方には今のお席にお座りいただいて、その場でお話をお願いします。それではまず最初に上地委員からお願いします。
○上地
　５団体のこのボランティア活動、１年間を通じての活動、地域でこういう活動をされるグループがあるということと、これからの 21 世紀を考えると、こういうボランティアはまだまだスタートだと思うんですね。そういう意味では皆さんの活動が根強く、今後浸透していく１つのスタートとして、大変心強く皆さんの発表を見せていただきました。
　といいますのは、私は教育関係の仕事をずっと続けているものですから、今のこういう、いろんな厳しいというか、社会の情

勢というか、子どもたちあるいは青少年、若者などの文化を見ても、大人から見ても周囲から見ても、これでいいのかなと。社会というのは、いろんな事件、事故というのが一方的にふえる傾向を持ってるわけですね。そういうところで明るいニュース、あるいは明るい未来というのがなかなか持ちにくい感じもします。

しかし、もっと希望を持って、これからの日本を開いていかなきゃいけないわけで、今、国としても、子どもたちを中心にした心の教育というのが大きな課題になってる。私はこういうこころ豊かな子どもたちをどう育てるか、あるいは国民として、あるいは世界の民として、先ほど最初の事務局の方からの話にもありましたように、老いも若きも子どもも、要するに問題は共生という、共に生きていくと、これが大きな課題だと思います。民族を異にした世界の民族が、いかに共に支え合って生きていくかという問題、富める人も貧しい人もと言っちゃあれですけどね、そういう問題。それと若い人も子どもも年寄りも、そういう共生する世界というのを築くには、我々がこれからどういうことをやっていかなきゃいけないのかと。

今日の皆さんのボランティア活動の中でですね、私は小さいときから、子どもの頃からそういう精神を育まないと、大人になってその辺の問題を真剣に考える、これはどの年代でも考えなきゃいけないことですけど、特に子ども時代の教育の中で、我々がともに生きるという心を育てる活動というのは、最も大事な課題だと思います。

これからの学校教育というのは、学校５日制、それと今、日本の文部科学省が言っているのは、とにかく学校教育の限界と言いましょうか、子どもの教育というのは学校だけでは、もう限界がきていると。地域、家庭もちろん地域の教育力をどう生かすかというのが、これからの子どもたちを育てる大きな課題であると言われてます。

だから、その地域の教育力というのが、きょう皆さんがかかわって紹介していただいた、こういうボランティア活動というのが、大きな教育力にならなきゃいけないだろうし、なってほしいと思います。

これは単に神戸市とか兵庫県だけではなくて、日本全体、世界を視野に入れた上でのそういう活動というのも、我々が子どもたちに体験してもらわなきゃいけない。

そういう意味では、みなさんの今日の取り組みというのは、更に広い、あるいは特に日本というのは、多民族が共生するというのに、まだまだこれからの課題だと思いますので、そういう広い視野のもとに頑張っていただければと思います。皆さんのこの体験というのが、今後生かされるものだと信じてます。以上です。

（拍手）

○佐藤

ちょっと今日遅れてきまして申し訳ありませんでした。実は、朝から京都に仕事で行ってたんですけれども、急いで神戸に帰って来てよかったな、と今日は思っています。みなさんの心のこもった活動のお話を聞かせていただいて、とても勉強になりました。

今、私が子どもの世界で必要だと思っていることが幾つかあります。私は今、50歳なんですけど、私たちの育った時代は結構大変だったから、その中でいろんなことを学んだ、大変な中に学ぶことがたくさんあったんですけど、今の子どもたちというのは、大変なことがない部分、逆に学ぶところというか、プロセスというものが抜け落ちた暮らしというのをしているんじゃないかと思うんです。何でもお金で買えますし、親が何でも与えてくれます。その中で、自分の手で切り開いていくとか、自分

が人に何か訴えることによって手に入れるとか、そういうプロセスを失くしてきてるんじゃないかと思います。

今日発表されたようなＮＰＯとかボランティアの活動というのは、今までの物をあげるとか、与えるとか、経験させてあげるというだけじゃなくて、そのプロセスをやっぱり一緒にすることによって子どもたちの中に、本当に実感というか、育つ力みたいなものを発見する活動なんだろうな、ということをずっとお話を聞かせていただいて思いました。

それを大事に１つしていただきたいなと思うのと、これはちょっと違う話なんですけれども、「子どもの時間」という記録の映画があるんですけれども、これはイナホ保育園という自然児を育てるような保育所の話なんですね。私たちの普段の暮らしというのは、常に大人の手が加わって安全なように、安全なようになってますし、ある意味では大人の都合で決めたステップをいかにうまくやるかということなんですけども、その保育所でやられてることは、一人一人の子どもにちゃんと持っている力があるんだと、その力というのを信じることが基本にあります。自分の中から発現していくというか、発していくというのをちゃんと信じて活動しているんです。

例えば、子どもにお箸を持たせたいと思いますよね。親は、早くお箸を持って上手に食べてほしいと思うんですけども、教えなくても子どもは友達のやり方を見てたり、年上の子のやり方を見て、自然につかむのからスプーンになって、お箸になっていくというわけです。それがなかなか待てない。マニュアルどおりに大人の時間で育てたいというのが今の親なんじゃないかと思うんです。

今日の活動なども全部それが関係あったと思うんですけれども、一人一人の子どもたちの中にある能力をいかに発見していくかと、これは別にボランティアだけじゃなくて、親も全部そうだと思うんですね。親自体がいつもそういうことを考えないと、先に手を差し伸べてしまうような状況にあるんじゃないかと。

ボランティアでもやはりそのあたり、子どもの能力を発見して、子ども自身が発見していくのをいかに助けるかということをしていただけたら、多分、子どもたちは自分できっと育っていくんではないかと。そのために大事なのは、これ自分に言ってるようなものなんですけど、大人が我慢することだと思うんです。さっきもお腹が空いても言っちゃいけないという話もありましたけれども、子ども自身が何か自発的にしようとするまで親はよかれと思っていろいろやります。多分、スタッフの方もよかれと思っていろいろ手を出されると思うんですけど、ぐぐっとそこを我慢して、きっとやるということが実は子どもの力を育てるのにすごく意味があるんじゃないかなと思います。私たちがつくってきた社会に合わない部分というのを今の子どもが持っている。次の世代のためにそれを否定するのではなく、その部分をちゃんと伸ばしてあげないといけないんじゃないか。

今日も小体連の話がありましたけど、大人の都合ですよね。そういうものに対して、ものを言えない子どもたちじゃなくて、ものを言えるようになって欲しいし、次の世代のためにそれを受け止められる大人でありたいなということを今日は感じました。

どうもありがとうございました。

（拍手）

○清水

途中でもちょっと触れたことかと思いますが、僕はフットサル、ビデオ、キャンプ、カヌー、稲刈り、いろいろ出てきまし

たけど、そして劇も入ります。種目は僕は何でも構わない。それを種目として手立て、得意なあるいは好きなスタッフの方が用いられたらよくて、だから結局はその種目をどのようにやるのかということが、皆さん方の今日の発表の中で私が一番気にしたところですね。

ですから、種目は何でもいいと申し上げてしまったので、種目が肥大化しない方がいいと、こんな珍しい体験をして子どもたちは喜んでいました。こんなすごいとこに行って来ました。だけどそれが子どもにとってどうだったかと、ここの部分ですね。

実は、手立てのいいユニークさに流されるのではなくて、そこから何をみなさん方が、あるいは子どもたちが、手に入れられていくのか。大きな成果はすぐには僕は入らないのがこの手の活動だと思います。ただ、この方向でいけば、私たちの期待するものが得られるのではないかと確信を持っておやりになることは必要だろうと。

あと中身のことですけど、結局は大事な部分がその中身の部分になるわけですが、楽しかった、うまくいった、変化したということもそうですけど、僕は、私たちの仕掛けとかねらいのことからすると、子どもたちは絶対に、僕はそこで葛藤を経験しないと意味はないという気がするわけ。何か来させられたけど面白かったとか、何かいじめっ子いたけども、でもその子と仲良くなったとか、いつものような快適な御飯がなくて、いつできるかわからへん御飯やったとかね、仲良くしたいのにできなかったけど、何か最後は折り合えたとか、葛藤のまんまで帰ることも含めてですよ。

だから僕は、そこでうまくいったということの評価で喜ばない方がいいなと。むしろその中で不安があったり、緊張があったり、それを乗り越えたことに対する部分が大事で、それをどうやってリーダーとかスタッフの皆さん方が受け止めていただけるかということですし、最終的にはその子自身が僕も昔こんなんやったなとか、入ったときはうじうじしていたなというふうに、その自分を受け入れることができるようになったら、僕は成功と違うかなと。

先ほどのお芝居のおやこ劇場さんのお話を聞いてて、僕は入ったときだめだったかもしれないみたいな感じで、もしか振りかえれたなら、もうそれはすごく子どもが一回りも二回りも大きくなっていることで、すると短所が欠点にならないわけですよ。自分の欠点とか短所らしきものを人前で笑えたら長所になるでしょう。

そういう何か心がやわらかくなったり、大きくなったり、オープンにすることが愉快にできたりということができたら、僕らの活動っていいなと思うし、多分、子どもが正しく自分を愛する力みたいなものを育んでいけたらすごいのに。そのための手立てをいろんなことで取り組んでいただいてる５つの事業、いろんなメニューに今日は触れさせていただいて、どうぞ皆さん方の周りから元気な子どもたちがどんどん育っていくようなことを期待させていただきたいと思います。

今日は元気が出ました。ありがとうございました。

（拍手）

○速水

最初のツール・ド・コミュニケーションのお話を聞きながら、私たちは子どもたちのいろんなことをお尋ねをしたんですけども、在日外国青年たちの姿というのも居場所をつくっておられるということは非常にすばらしいな、と思うんですけども。例えば日本の青年たちに彼らからのメッセージはあるんだろうかということを少しお聞きできたら、と思ったりしましたけども、質問できなくて申しわけなかったですね。

またいろんな機会に、ぜひ伝えていただきたいなと思うのは、先ほどもワールドキッズコミュニティの発表の中でもおっしゃられてましたけども、日本の子どもたちというのは、なかなか自分の気持ちと行動とが一致しなくて、行きたいけども行けないみたいなところが。これは青年も一緒で、一緒に何かしようよと思いながら、なかなか一歩を踏み出せずにいるという、そのきっかけは何かというと、いろんなメッセージをもらいながら、自分の中でそのことをどのメッセージに対して自分がどうできるかみたいなのを考えながら動いていくことだと思うんですね。

どうしても、その国々の気質みたいなものがありますから、それをお互いに認め合いながらつき合っていかなければ、それを否定しあってつき合っていくと、人の間というのはうまくいかない。ですから、そういうメッセージを是非どちらも出していただけたらなと思います。

それからワールドキッズコミュニティの皆さんは、サッカー、フットサルを通じてさまざまな活動を展開されてます。例えばほかにはおやこ劇場だとか、米づくりだとかキャンプとかありましたけれども、そういうところへも一遍、例えば年間のメインはフットサル、サッカーだけれども、ちょっとほかのメンバーとキャンプしないかとか、米作ってみないかとか、劇遊びみたいなことをしてみたいなというところでかかわることができると、もっとそのサッカーという場面、それからイベントのお祭という場面以外で何か触れることができます。それはお互いにいえることだと思うんですけれども、そういうことで自分たちの活動に少し違った場面を取り入れるというのも、例えば今日は５つのグループですけども、一緒に発表いただいて、一緒に１年間取り組んでいただいた１つの成果として、そんなものが生まれてもいいかなと思いました。

それから、一つ一つの活動のことをお話させていただいたらいいんですけれども、時間も制約がありますので、余りお話できないかもわかりませんけれども、一番感じたのは私も子ども会で仕事をしておりまして、いろんなプログラムで子どもたちやリーダーと出会って活動してます。いつも一番いろんなことを吸収させてもらってるん違うかなと思うんですね。それは皆さんも一緒じゃないかなと。子どもたちの世話をしたり、青年たちの世話をしながら、一番いろんな形で学習できている、勉強できているのは自分自身ではないかな、と思うんですね。

非常に大事なことは、何か人のためにやってる、子どものためにやってる活動が、実は自分の成長に一番役立っているということを忘れてはいけないなということを、今日は発表を聞きながら随分と教えていただきました。

それから、更にフロンティア会とヒューマニティの活動の中で、今一番行政もいろんなところでも取り組みが非常に薄くなっている青年教育という部分ですね。青年たちが自分たちの中で学習の機会を得て学ぶという場面が随分あったな、ということ。その青年の姿を見ながら、子どもたちは随分と刺激を受けているんだろうな、と思うんですね。また反対に子どもたちの姿を見ながら、自分たちが刺激を受けてるという、青年が活動する場という、こちらの方もそうですし、おやこ劇場の中でも青年が、かかわっておられましたけれども、非常に大事なのは、例えば私の世代と子どもと接しても親と子なんですね。ひょっとすれば、小さな子どもであればおじいちゃんと子どもかもわかりません。

そうすると敏感に子どもたちの行動と

か、動きについていけなかったりするわけです。だけども、近い年代の人たちというのは、それを吸収して一緒に動けるんですね。そういう場面というのは、非常に大事なことですから、子どもたちの活動であってもいろんな世代がかかわっている。例えば高齢者の活動であってもいろんな世代がかかわっていることというのは、非常に大事なことだなあ、と今日の発表を聞きながら、感じさせていただきました。

来年度はこういう支援があるかどうかわかりませんけれども、だけども培われたものをどう生かしていくかということ。それから、例えば活動に対する過程みたいなもので、費用みたいなものをどう得ていくかということも、皆さん方自身ボランティアのグループであり、ＮＰＯでありというのは、いつも支援を受けてばかりで活動しているというだけではなしに、自分たちの土台をつくっていく１つのきっかけとして今年があったんだということで、非常に大事なことだと思います。

ほかの助成とか、支援団体の援助を受けることも大事ですけども、自立していくための自立できるＮＰＯ、もちろん皆さんそうなさってると思いますけども、それから、１つでできなければお互いに協力しあいながら取り組んでいく活動ということを、私も一緒にこれからも考えていきたい、と思います。

今日はどうもありがとうございました。

（拍手）

○事務局

どうもありがとうございました。

これで講評者の４人の先生方からご講評をいただいたんですけれども、会場の方から何かご意見等、何かございますでしょうか。

今日発表していただきました５グループの方で、今日は皆さん聞かれるばかりでしたけども、逆に講評者の方に何か聞いてやろうということがありましたら、どうぞ。

○小川

どの方にというのではないんですけれども、今回の助成金は、事業終了後に支払いが行われるという形の助成金なんですけども、やっぱりこういう活動をしていく上で、後日精算というのは、ちょっと活動がしにくいということで、今後こういう助成金をされる際には、事後精算ではなく事前にお金の方をいただきまして活動が円滑に行われるようにしていただきたいなということで、ご要望をさせていただきます。よろしくお願いします。

（拍手）

○事務局

今後の話が出ましたので、来年度以降のことにつきまして、事務局の方からご説明します。

今年度、被災地の子どもたちを対象とした体験活動の取り組みを支援する制度として、当事業を実施したわけですけれども、新規事業ということもあり、短い周知期間でありながら 16 のグループに応募いただきました。このように、体験活動に関します取り組みについての支援、ニーズが高いこと、それから４月から学校の完全週５日制が導入され、ますますこのような取り組みを促進していくいうことが重要であるということから、お手元の方にお配りしておりますように、来年度から全県を対象としました「ウィークエンド・子ども・いきいき体験事業」を県の方で実施することになりました。

この事業は、広く県下の一般の子どもたちを対象に参加できる実施計画をコンペ方式により、ＮＰＯやボランティアグループから県下 50 事業を公募選定して採用団体の事業費を助成するものというものです。

詳細につきましては、現在検討中という

ことでして、県民生活部のこころ豊かな人づくり推進課というところで実施することになっています。

それからもう一つは、「被災地空き地活用パイロット事業」です。

こちらは、被災地の賑わいづくりを促進するため、被災地にまだ多く点在しております空き地を活用して、まちの賑わいづくりにつながるような活動を支援するというものでして、例えばご近所の近くにある空き地を借りて、フットサルやスリーオンスリーなどのスポーツ教室をやっていただくとか、あるいは商店街の一角にある空き地などを借りていただいてライブや音楽会をやっていただくというようなことに対して、その空き地の整備費や活動費について助成をするというものです。助成金の上限は 150 万円ということになっています。

こちらにつきましても、詳細については現在検討中でして、詳細が固まりましたら、またご案内をさせていただきます。

なお、この子どもたちの体験活動促進事業につきましては、今ご紹介しましたこれらの事業に引き継いでいくということで、今年度をもって終了させていただくということになっています。

それから、先ほどご意見いただきましたことにつきましては、私どもも来年度実施にあたっての検討材料とさせていただきます。

それではほかに何かご意見ございますでしょうか。

○前田

先ほど、自分たちの活動を学校や家庭やそういうところに見ていただくチャンスがないのかと講評されたのですが、今日のこの報告会ももう少したくさんの人に聞いていただけたらうれしかったなと思います。かなり広報していただいてたと思うんですけれども、こういう活動に興味を持たれる方が本当に少ないんだな、としみじみと感じました。

○事務局

今日のこの報告会につきましては、冊子に取りまとめて、次のステップにつなげていきたいと考えております。

また、各団体さんの方には、報告書を作る際に、いろいろご協力をお願いすると思いますけれども、またよろしくお願いします。

報告書ができましたら、県のホームページに掲載するとともに皆さんの方にもお配りしたいと思っております。

ほかに何かございますでしょうか。なければ、丁度時間が 16 時になりましたので、これで子どもたちの体験活動促進事業報告会を終了いたします。

本日は、どうもありがとうございました。